正岡子規と牛久沼

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

正岡子規が水戸へ向かう途中で詠んだ句
－寒さうに鳥のうきけり牛久沼－

正岡　子規

正岡子規は慶応3年（1867年。翌慶応4年9月明治に改元される）9月に松山城下（現愛媛県松山市花園町）で、松山藩士正岡常尚の二男として生まれる。4歳のとき父を亡くし、祖父の訓育と、叔父の影響を受けて育つ。自由民権運動に触発され、政治家を目指して明治16年（1883年）に上京、東京大学予備門に入学。しかし、21歳のときに喀血して『子規』と号したころから真剣に文学を志し、大学中退を決意して入社した日本新聞社が発行する新聞『日本』で、俳句や短歌の革新を叫び、新体詩を試み、写生文を唱える。明治28年（1895年）からは脊椎カリエスの病苦にあえぎながらも、死の2日前まで随筆『病牀六尺』を発表し続けて、明治35年（1902年）9月に亡くなる。『写生』に根ざした子規の文学は、近代文学史上に金色燦然（さんぜん）と輝いている。（資料提供　松山市立子規記念博物館）

次に正岡子規著で柳生四郎解説の崙書房刊『水戸紀行』を引用してみた。

子規は、明治22年（1889年）、春の休暇を利用して、いよいよ水戸旅行を決行することにした。同宿の友人一人をうながしての弥次喜多旅行。話が決まったら善は急げと、早速3日を出立の日と決めて、草履、朝飯などの支度を整えたのは4月2日の夜のことであった。同行二人、もとより気軽な書生の旅行のこととて、大した用意もなく、草履履きで、持ち物としては手帳一つを入れた鞄と蝙蝠（こうもり）傘くらいのものであった。

翌4月3日は神日本磐余彦尊（かんやまといわれひこのみこと）神武天皇のおかくれになった日、すなわち神武天皇祭の当日…本郷から湯島天神下の切通坂を下りて上野に出たのだが、初桜がちらほらと咲きかけているのであった。そうこうしているうちに千住に着いた。ここで子規は一枚のはがきを買って、これから訪ねて行こうとする水戸の友人菊池謙二郎に宛てて、これから君を訪ねるために、今日出立した旨のことを認めて投函した。

子規らは、先の長い旅行のことを考えて、少しでもスタミナを蓄えておく必要があり、千住から人力車に乗った。帰りの車を安くまけさせて乗り込む。

車を下り江戸川を渡れば松戸駅なり。それより一里余にして小金駅に至る。

漸々（ようよう）我孫子駅に至る。川辺に来りぬ、始めて知りぬこれこそ阪東太郎とあだ名を取りたる利根川とは。標柱を見れば茨城県と千葉県の境なり。

宿場を通り抜けたところで道は二股に分かれる。そのまたのところに大きな枯れ木が二本残っており、その根元に道標が置かれてある。成田と取手方面に分かれる道案内である。真ん中に大きく成田道と刻まれ、「東木下し四里、成田九里、西小金三里、北取手二里、牛久五里、土浦九里、水戸二十里、筑波十里」と、各地への里程が刻まれている。なお庚申供養塔があり、これにも「これより右布川街道、従是左水戸街道」と道案内が刻まれている。また青面金剛尊をまつった碑にも、「左水戸みち」と刻まれており、相当に旅人の多かったことを物語っている。

利根川畔に出、渡しを渡って取手に入る。明治17年（1884年）、女化原の陸軍大演習にお出でになった明治天皇もこの渡しに乗ってお越しになったのである。取手、吉田、小泉、谷中と過ぎて水戸橋を渡り藤代に入るのだが、相当くたびれているので藤代に泊まることに決めた。

四日朝起き出でゝ見れば小雨しょぼしょぼとふりゐたるに少し落胆したれども春雨のこと何程の事かあらんと各携へ来りし蝙蝠傘をひろげぬ。

宿を出た子規らは小貝川堤に出、宮和田の渡しを渡って、小通幸谷の観音様あたりで船を下りた。

子規のノートには『四日、小雨、藤代ヲ発シ常州ニ入リ牛久沼ニ沿フテ牛久ニ至ル』と記されている。子規がこのとき、明治22年4月4日に牛久沼を詠んだ句、「寒さうに鳥のうきけり牛久沼」がある。

秋山　真之

秋山真之は松山城下の下級武家屋敷の一郭で慶応4年（1868年）4月に生まれ、その前年に近所で生まれた正岡子規とはつきあいがあった。明治20年代に入ると日本政府内では「極東征服（ウラジオストック）」の野望を露骨にするロシアに属国にされる危機感が高まった。司馬遼太郎は『坂の上の雲』で『秋山好古・真之兄弟がいなければ日本はどうなっていたか、わからない』と書いている。海軍中佐の真之は、日本海軍連合艦隊司令長官東郷平八郎大将の下で作戦参謀職に配属され、ロシアバルチック艦隊を撃滅させるための作戦「丁字戦法（能島流海軍戦法などを基にした）」を立案し、それを用いて同艦隊を明治38年（1905年）5月の日本海の海戦において邀撃（ようげき）、日本の政略上の勝利を決定づけた。海軍官僚としての秋山真之の最終階級は中将。
（正岡子規と秋山真之の写真提供は松山市立子規記念博物館）